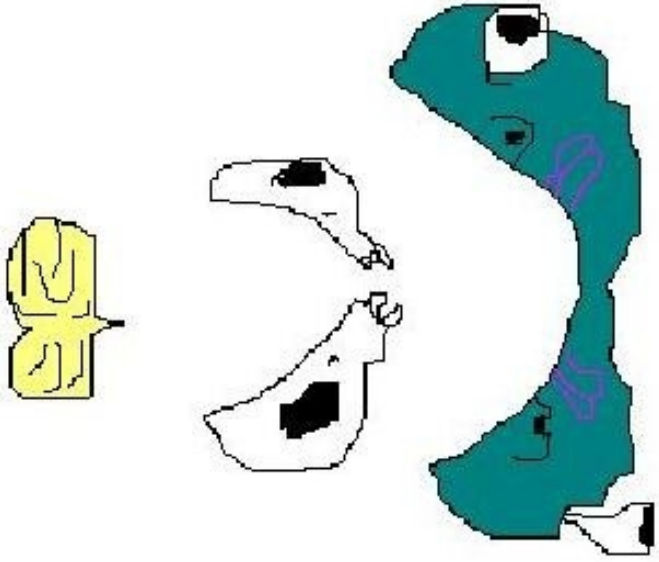
package code : "ZOMBIE"



misato
akira

ぼくたちはゾンビです

　ぼくたち、わたしたちはゾンビです。ゾンビですから死にません。全体を一気に焼かれるとか、そこまでされたら死ぬかもしれませんが、ものすごい回復力を持っているので、少なくとも簡単には死にません。
　頭部がたくさんあるように見えますが、ぼくたち、わたしたちは一つのゾンビです。ヒトはぼくたちを見つけると攻撃してくるので、ぼくたちだって怪我をします。残った体で補えるのならそのまま傷跡を再生させますが、たとえば腕が吹っ飛んだりした場合にはそのままでは腕を失ったままになります。それはとても不便です。そういう場合は新たに体を取り込みます。具体的にはぼくたちの全身を使って新鮮な体を継ぎ当てます。ぼくたちは、動きは鈍いですが、力は普通のヒトよりもずっと強いので、捕まえてしまえば簡単に引き裂いて傷ついた部分にあてがうことができまーー

　ドオオオオオン！
「殺ったか？」
「いやわからん、当たりはしたはずだ！」
「もう一発打つか？」
「そうしよう」
　ドオオオオオン！！
「もういいだろう」
「確認だ」
「個別に行くな！　バディで行け！」
「じゃあ俺が」
「俺も行きます」

　ああ、ほら、ぼくたち、わたしたちはこんな風に右肩が爆発し、体の一部が離れ、体がバラバラになっても死ぬことはできないんです。痛いよう。痛いよう。肋骨に風が通ってヒューヒューする。この状態ではぼくたち自身で再生することは難しいです。だから新しい肉体をあてがいたいのですが、おっと誰か近づいてきましたね。離れた右腕には気付いていないみたいです。足を掴んでみましょう。

「うわあああああ！」
「どうした？！」
「足が、足が！」
「腕だけで動くだと？　忌まわしきゾンビめ！　動くなよ、すぐ焼き払う！」
　シュゴーーーーーーー！
「よし、消し墨になった、外れるはずだ」

「助かった」
「気をつけろようわあああああ！」

　二人のヒトは右腕に気を取られていたようで、ぼくたちわたしたちがそっと近づくのには気付かなかったようです。簡単に二人分の新鮮な体が手に入りました。とりあえず失った右腕のために右腕をいただきましょう。
「ぎゃあああああああああああ」
　肩口から裂くと、叫び声をあげて気を失いました。血が滴ります。鮮やかに赤いので食欲をそそられ、少し舐めてみます。うん、ほのかにしょっぱく、鉄の味。全身に染み渡るようです。もう一人が怯えた目でガクガクしています。腰は抜けているようで動けそうにありませんが、念のために捕まえて脚を折っておきましょう。まずは手にあるこっちの体を取り込むことに専念します。
　右肩を引き裂いたおかげで内臓が少しでているから、これをまずぼくたち、わたしたちの腐りかけた内臓と交換しましょう。ぼくたち、わたしたちには美的センスというものがないのでどうしても歪な形になってしまいますが、仕方がありません。ぼくたちのお腹を引き裂いて腸を千切り、新鮮な内臓を押し込みます。しばらくすると癒着してぼくたち、わたしたちの一部になります。右腕も、もうくっついていますね。なんだか体が前よりも軽く動かしやすくなりました。残った体幹はそのまま左体側に添わせます。近頃腐敗が進んでぽろぽろ崩れるようになってしまったので。脚は引き裂いて肉と骨に分けます。骨は背骨を補うのに使います。肉はそれを覆うのに使います。脳みそはすすって飲んでしまいましょう。眼球は弾力があって噛んだ食感がおもしろいです。頭皮はこっちの骨が見え始めた頭部に被せておきます。
　さあ、今日はもう一体、新鮮な体があります。なんて喜ばしい事でしょうか。そういえば左膝が少し弱くなってきたので、体まるごと植えましょうか。うん、悪くない接続具合です。
「……うっ、うわあああ！」
　あれあれ、膝が目を覚ましてしまいました。ぼくたち、わたしたちは彼の顔を掴んで話しかけます。
『あなたはだあれ？』
「ぎゃあああああ！」
『あなたはぼくたちだよ、今日からゾンビだ』
「俺は、俺は……！」
『俺、じゃないでしょ？　ぼくたち、だよ。ゾンビだよ』
「俺は……」
『ぼくたち』
「おれ、は」
『ぼくたち』
「ぼく……たち」
『そう、ぼくたち。ぼくたち、わたしたちはゾンビだよ』

『ぼくたち、わたしたちはゾンビだよ』
　ぼくたちは個を失い、全は続いていくことを強いられるのです。たとえ、痛くても。痛くてつらくても。

　目から雫が流れ落ちて、涙かと思ったらどす黒い液体だった。とめどなく流れ続けて私は泣いている気分になる。と、左目の視界が途絶え、手の上に丸いもの。眼球かしら。
　――泣けるものなら泣きたい。
　口から血を流した彼が横たわっていて、少し、ウジが湧いている。右目だけでそれを見ている間も目から液体は流れ続け、彼の体を汚してしまう。彼の腰に短剣が下げてあるのに気付く。私は手に取り、刃をひらひらさせる。思い切り喉に突き刺す。……なんともない。傷からまたどろどろの液体が溢れ出しただけだった。今度は彼の左顔面に突き刺す。ぐじゅっと音がして刺さる。刃を動かし、左眼球を取り出す。私の左目があったところにぐっと埋め込む。
　――貴方はこんな風に世界を見ていたのね。
　次は服ごと彼の胸を切り裂く。肉がぐねぐねしている中を探る。きっとこれが心臓。ウジがたくさん。貴方のハートは私だけのものよ。がぶり、と噛み付く。弾力があり、けれど口内に彼が染み渡る。咀嚼し、また一口。また一口。二人で一緒に堕ちて朽ち果てて。肩の肉がずるりと流れた。

おやすみなさい、アイドルホース

　彼は「流星の貴公子」と呼ばれた。脚部は元から強くはなかったのだろう。栗東トレセンがある滋賀県の条例により火葬できず、その亡骸は北海道の土に眠る。「あの日」、彼を早く眠らせてくれていたら。
　私は時々、人外の声を聞く。笑い声や愚痴や、嘆き、怒り。近くの声も聞くし、遠くから届く声もある。本業は市立病院の心臓外科医で、けれど一日の大半はこれから手術を行う患者への説明でつぶれている。伝えられる色々に耳を傾け、苦しみを和らげようとする。可能な場合もある。不可能な場合はもっとある。それが遠くからのものだった時は特に。
　短い夏休みの二日目。私は安平町に居た。お盆ということで観光客も多いらしく、どの墓にも花が供えてあった。人は居ない。声を辿る。彼が居た。美しかった栗毛も流星も見事に風化し後足はグチャっとなった、彼が、居た。彼の呻きを聞く。宥める。呻く。説く。呻く。労う。泣く。
　泣き声から幻はほどけてゆき、そこに彼の碑があった。
「ゆっくりおやすみ」
　買った牛乳を供え、立ち去ることにする。泣き疲れた彼が、深く、眠れるといい。

余韻

　太陽が高く昇り、アスファルトから陽炎。夏は終わった。夏は終わった。夏は終わった、のに。
　あの人に美人な彼女ができて、しかも彼女は私の尊敬する人だったりして、私は私の恋心を殺すことにしました。無感動な日々を過ごしました。考えずに済む事務作業を片っ端から仕上げました。テレビから好きな俳優の声が流れても顔を上げませんでした。自炊する気にもなれずコンビニに行ったら、「あっ、ごめんなさい」とぶつかったのが、彼女を連れたあの人でした。
　眩暈とのぼせ、小刻みに震える手。私は死んだ。私は死んだ。私は死んだ、のに。

　小さなくだらない喧嘩だったのにね。逆上した私は貴方の食事に強毒性の防腐剤を入れた。どっさり。私は標本作成を生業としてきたから、手元に毒はいっぱいあったの。怒らせた貴方が悪いんだから。
　食事の後、苦しそうに顔を歪めて倒れた貴方。死ぬだろうと思った。死ぬだろうと思ったけれど、なぜか私は一晩中貴方に心臓マッサージを施した。貴方の名前を呼びながら。おかげで防腐剤は貴方の体の隅々まで行き渡った。
　朝が来て、動かない貴方を私たちのベッドに運んだわ。重かった。ベッドに横たわる貴方はただ眠っているだけのように見えた。だから私は作業場で仕事の続きをやることにした。たくさんの死体や肉片を相手に。いろいろな薬品とピンセットを手に。
　仕事を終えてベッドを見に行くと、貴方はまだ眠っていた。胸に耳を当てると全く動いていない。貴方の服を脱がし、防腐剤を持ってきて素手で貴方の体に塗りこんだ。仕事のときは使い捨てのゴム手袋を付けるのだけれど。貴方の顔、首、背中、胸、腕、お腹、陰部、脚、指先まで。防腐剤を付けた手で撫で回した。愛しい。毎晩それを繰り返すうち、それは私の日課になった。
　ねぇ、もう私、限界かも。
　いつものように防腐剤を貴方の手に塗りこむ。私の手は毒素のために皮膚炎でぼろぼろ。貴方の白くきれいな手とは対照的だね。この前、久々に知り合いの医者と会ってね、病名を言われたわけじゃないんだけど、病院で精密検査を受けるようにって薦められたわ。そうね、貴方が眠ってから私、がりがりに痩せてしまったから。
　ねぇ、私、貴方を私だけのものにしたかったの。
　私も眠ろうかな。おやすみのキス、させてよ。防腐剤がたっぷり塗りこまれた貴方のそのくちびるに。……苦いね。なんでこんなもの飲み込んじゃったの？
　貴方の手が私の手を握り返したのでびっくりする。顔を見ると貴方と視線が合った。手を引っ張られて、私もベッドに横になる。貴方は私を抱きしめる。私にも毒の反応が出る。苦しい、苦しい。貴方の手は私の頭を撫で、そっと私を抱きしめる。抱きしめる。抱きしめる。冷たくて、優しい。
　これで、貴方とずっと一緒にいられるんだ。二人だけのベッド。死んだって誰も気付かないよ。ずっとずっと前から、この家には死臭が漂っていたんだもの。

ゴミの捨てかた

　急に寒くなったせいか流行風邪にやられてしまって、自炊する気力もなくなり一週間のレトルトおかゆ生活。そういうわけで冷蔵庫の魚と野菜と卵が見事に期限切れ。あーあ。魚と野菜をゴミ袋に放り込む。卵は割れると厄介だから冷凍庫に入れた。
　夜中になんだか声が聞こえるなって起きてみたら、ゴミ袋から出てきた魚と野菜がわいわいがやがや文句を言っている。「ちょっと期限過ぎただけなんだからちゃんと食えよ！」だそうで。けれど彼らからはしっかり腐臭が漂っている。頭にきたので大きな鍋にお湯を沸かし、彼らを次々入れて煮立たせる。やがて彼らは静かになった。鍋から取り出し、再びゴミ袋へ。鍋は丹念に洗った。
　で、卵はおとなしく冷凍庫で凍っていたので、生ゴミは冷凍して捨てたほうがいいかもしれない。

package code : ZOMBIE

著者 ： みさとあきら （ｃａｇｅ）

ｃａｇｅ ： we must Control our AGgressive Emotions.
http://maruta.be/cage

Copyright (C) 2011 ｃａｇｅ All Rights Reserved.
powered by ブクログのパブー （株式会社paperboy&co.）